

# 鈴木安蔵とキリスト教 I

## 福島県小高へのキリスト教の影響<sup>1</sup>

森 島 豊

### はじめに

本論は、鈴木安蔵とキリスト教との関係について考察するものである。鈴木  
の弟子たちや研究者の多くは、生前の鈴木にキリスト教との明確な接点を認め  
ていなかった。実際、鈴木は教会生活を送らず、洗礼も受けていなかったう  
え、その著作においてもキリスト教思想を反映したと見られる箇所は極めて少  
なかった。さらに、家庭生活においても宗教的な要素はほとんど存在しなかつ  
たと伝えられている。以上の点を考慮すると、鈴木が自らの学問においてキリ  
スト教思想を自覚的に継承したとみなすことは困難である<sup>2</sup>。

けれども、戦後の日本国憲法の制定に影響を与える時期に至るまで、鈴木は  
キリスト教的環境の中で育ち、熱心なプロテスタント教会の信仰者に支えられ  
てきた。両親と姉はいずれも洗礼を受けたキリスト者であり、関係も良好で

---

1 本論文の執筆に際し、資料の提供および調査において多くのご協力を賜った。ここに記して謝意を表する。飯島信氏（日本基督教団小高教会牧師）、寺田亮氏（埴谷・島尾記念文学資料館主査）、寺田進氏（日本基督教団原町教会牧師）、大久保直子氏（鈴木安蔵遺族）、日本キリスト教会神学校図書館、東北学院史資料センター。

2 筆者は以前、人権思想史の中で鈴木安蔵を取り上げ、抵抗権の受容史から彼の思想の系譜を辿り、プロテスタント的抵抗権の影響が潜在的な仕方であることを論じた。拙著『抵抗権と人権の思想史——欧米型と天皇型の攻防』（教文館、二〇二〇年）参照。ちなみに、鈴木だけでなく、法曹界において宗教的要素を肯定的自覚的に継承する法学者は少ない。

あった<sup>3</sup>。戦後の日記には、母を夢に見たときの感慨や（一九四七年十月十一日、十二日条）、父の命日（一九四八年二月一二日条）、母の命日（二月二九日条）に両親を偲ぶ記述が残されている。姉の鈴木瑛（テル）は婦人伝道者でもあり、京都帝国大学入学後に母を亡くした鈴木に対し、「あなたは、好きなことをしなさい。私はいくらかでも援助してあげるから。好きなことをやるということが、自分のために本当にいいのだから」と励ましの手紙を送り、別の手紙では「このお金は武之介には内緒だから、黙って受け取りなさい。有難うということは言わなくていいから」と記していた<sup>4</sup>。こうしたやり取りからも、鈴木が家族に深い信頼と親愛の情を抱いていたことがうかがえる。

さらに、妻・俊子の両親であり、熱心なプロテスタント教会の指導者でもあった栗原基夫妻もまた、鈴木を支えた。京都学連事件後の結婚生活や子育ては、栗原家の助力なくしては成り立たなかったであろう。鈴木自身、次のように述べている。

わたくしたちが京都大学生のとき治安維持法の最初の事件であった学生社会科学連合会事件でとられるや、岳父の寝食を忘れての救援活動は、ただただ頭の下るのみである。わたくし自身、岳父の心のはげましに、どんなに力づけられたかは、ここにしるすこともできない。わたくしの今日までの学問的業績の基礎は、岳父の物心両面にわたる支援なくしては不可能であった。「法律史」を岳父にささげたのも、その感謝の一端をあらわしたものである<sup>5</sup>。

また鈴木は、戦後の政府の憲法改正案（松本案）に対して、憲法研究会の憲法

---

3 立正大学所蔵「鈴木安蔵日記」（真辺美佐「立正大学所蔵「鈴木安蔵日記」——（一九四七年一〇月二日～一九四八年一二月三十一日）の翻刻と分析（上）」『立正大学文学部研究紀要』四一号、二〇二五年三月、所収）——一四頁参照。

4 鹿島理智子「家庭での鈴木安蔵先生——文学を愛した父」（金子勝編『鈴木安蔵先生から受け継ぐもの——鈴木安蔵先生生誕百年記念シンポジウムの記録』金子勝、二〇〇五年：非売品、所収）六四頁より引用。手紙類の一部は南相馬市の「埴谷・島尾記念文学資料館」が所蔵している。

5 鈴木安蔵「岳父栗原基をしのぶ」（『思い出の父 栗原基』菊沢喜美子、一九六九年、所収）九六～九七頁。

草案の立場から批判を執筆したが、それを英訳する際には基に添削を受けるなど、折に触れて多くの援助と協力を受けている<sup>6</sup>。基の訃報に接した鈴木は次のように述懐している。

岳父には、今日筆紙に尽しがたい多くのご厄介をかけ、また、その人格に心から敬意を抱き、しばしばそれに対して何一ツ十分に報いることもなしに、その逝去に会った心痛にうちひしがれるおもいである<sup>7</sup>。

鈴木はその基を評して「第一に、岳父は、イエスの言葉にあるように、われ世に來たれるは人に仕えられんがためにあらず、人に仕えんがためなり〔マタイ福音書一〇章四五節〕という生涯であつたとおもう」と記している<sup>8</sup>。基の生涯と切り離すことができないキリスト教信仰を、鈴木が否定していたとは考えられない。

これらの事実からうかがえるように、キリスト者であった家族との関係は良好であり、家族との関係性が原因となってキリスト教から距離を置いたとは考えられない。むしろ、鈴木の日記や俳句には、彼自身が折に触れて聖書の言葉に親しんでいたことが確認できる。たとえば、研究の「成果をあげたい」<sup>9</sup>という思いが強く表れていた戦後の一九四七年大晦日の夜には、日記の頭注に年初の言葉として欽定訳聖書（King James Version, KJV）の一節が英語で記されている。しかも、その引用箇所は有名な「ぶどうの木のとえ」であり、キリストに結ばれていることによって豊かな実りが約束されている聖書箇所であった。また、埴谷・島尾記念文学資料館に所蔵されている未刊の歌稿<sup>10</sup>には、

6 鈴木安蔵『憲法制定前後——新憲法をめぐる激動期の記録』（青木書店、一九七七年）二三〇頁参照。「レプセ事件」でロシアから来日したレプセに渡す英文の文章も栗原基に添削してもらっている。鈴木安蔵「学連事件資料と二、三の回想」（『立正大学教養部紀要』第九号、一九七六年、所収）一一六—一一七頁参照。

7 鈴木安蔵「岳父栗原基をしのぶ」前掲、九五頁。

8 鈴木安蔵「岳父栗原基をしのぶ」前掲、九六頁。

9 立正大学所蔵「鈴木安蔵日記」（一九四七年十二月三十一日条）前掲、六三頁。

10 若松丈太郎によれば、「延べ数では短歌六六二首、俳句五八句、詩二篇、それに、削除されている短歌二四首、俳句一三句が記されている」。この中のいくつかは『政治文化の新理念』の巻末や、平田良衛が出版した雑誌『農村だより』に掲載され、また鈴木の子

「聖書を読みて十一首」が収められており、そこではキリストの境遇に自らを重ね合わせたかのような心情が詠まれている<sup>11</sup>。彼は自らの短歌について「此処に録載した歌はその稚拙さはともかく、何れも真実の我が姿の半面である。浅はかにして愚かしい姿であるが、……我が真実の姿である」<sup>12</sup>と述べている。これらの資料からも、鈴木が戦後に至るまで聖書を読み、そこから思索を深めていたことが窺える。

以上のことから明らかなように、鈴木は幼少・青年期においてキリスト教環境の中に育ち、戦後に至るまで人格的なキリスト者に支えられるとともに、自らも聖書に触れ続けていた。本論では、このような鈴木安蔵とキリスト教の接点に焦点を合わせ、彼が思想的形成期にキリスト教をどのように評価したのかを確認し、キリスト教から距離をおいた思想的な理由を考察する。

## 福島県相馬地方への伝道

小高教会設立に至る福島県相馬へのキリスト教の布教は、仙台神学校（一八九一〔明治二四〕年に東北学院と改称）の宣教師や伝道師たちの働きによる。仙台神学校創設者の一人である押川方義は横浜バンドの一人で、日本で最初のプロテスタント教会である日本基督公会（現・横浜海岸教会）においてアメリ

---

人の娘たちが選んだ一三七首が遺稿集『榊花』（非売品）に収録されている。若松丈太郎「極端粘り族の系譜——相馬地方と近現代文学」〔『若松丈太郎著作集 第二巻』コールサック社、二〇二二年、所収〕二三五頁。小木宏「鈴木安蔵先生と短歌」（金子勝編『鈴木安蔵先生から受け継ぐもの』前掲）四三頁参照。鈴木安蔵『政治文化の新理念』（利根書房、一九四二年）二九九―三〇一頁参照。

11 鈴木安蔵「歌稿一」（埴谷・島尾記念文学資料館所蔵）。鈴木曰く、これは「身辺の日記、ノートに記されてある我が歌を此處に大体年代順に書きといめることにした」とあり、「一九三七年五月三十一ペンをとり始む」と記してある。

鈴木の人たちが選んだ『榊花』には、キリスト教に関連する歌が選ばれていない。それは小木が「残念ながら、というか失礼ですけれども、誰か歌人が関わったのではなくて、三人の娘さんが選ばれて」ということになるかも知れないが、別の見方で言えば、三人の娘たちが選ばなかったのは鈴木安蔵の家庭教育にキリスト教的価値観が無かったという証左でもあるだろう。小木宏「鈴木安蔵先生と短歌」前掲、四三―四四頁参照。

12 鈴木安蔵「現身抄」（埴谷・島尾記念文学資料館所蔵）。旧字体は新字体に改めた。

カ・オランダ改革派教会のJ.H.バラから洗礼を受けた。仙台神学校の創設時に重要な働きをしたW.E.ホーイ（W. E. Hoy, 1858–1927）とD.B.シュネーダー<sup>13</sup>の二人は、ともにアメリカのランカスター神学校を卒業したアメリカ・ドイツ改革派教会の宣教師であった。つまり、改革派教会の流れを汲んでいることから明らかなように、仙台神学校はジャン・カルヴァンの神学を重んじ、教会制度においては長老制度を採用し、中会を組織した<sup>14</sup>。

押川は吉田亀之助と共に仙台に移り、記録によれば一八七九（明治一二）年頃に相馬に伝道を開始した<sup>15</sup>。一八八六（明治一九）年に中村講義所<sup>16</sup>が開設され、同年の中会書記藤生金六の報告書には「仙台の伝道地なる相馬は内地の伝道地中にて尤も望あるものなり」とあり<sup>17</sup>、一八九一（明治二四）年に吉田亀太郎が同講義所に定住の牧師として着任する。記録によれば、吉田は相馬に中学校の設立を働きかけ、郡長や県当局に迫って交渉し、一八九八（明治三一）

13 David Bowman Schneder（一八五七–一九三八年）。ランカスター神学校を卒業後、米国で四年間牧会後、ドイツ改革派教会の宣教師として日本へ派遣され、仙台神学校に赴任し、後に第二代東北学院院長となる。一九二〇年に米国で排日移民法の成立を阻止するために尽力したり、一九三六年に日本の真意と目的を説明するため、ルーズベルト大統領やハル国務長官に進言した。勲四等旭日小綬章（一九一六年一〇月三十一日）、勲三等瑞宝章（一九二四年二月一日）、勲三等旭日中綬章（一九三六年六月二日）を授与している。シュネーダーについては以下が参考にできる。ウィリアム・メンセンディーク『シュネーダー博士の生涯——その人とその時代——』笹原昌・出村彰訳（学校法人東北学院、一九七六年）。出村彰編『シュネーダー説教集』（学校法人東北学院、一九七一年、非売品）。

14 清水東四郎『日本基督教会東北中会史』梅津吉之助・成瀬高編（成瀬高、一九六八年）一–九頁参照。

15 鎌田昌次郎「九十年の恵みと感謝」（富田重幸編『中村教会創立九十周年記念集』日本基督教団中村教会、一九七七年、所収）二三頁。

16 当時、日本ではまだ信教の自由が憲法で保障されていなかったもので、公然と伝導することが難しく、「伝道所」や「教会」という名称が認められなかったので、「講義所」という名称を用いていた。成瀬高編『一九六四年拾月創立満六拾五周年記念 日本基督教団原町教会の沿革（六拾五年畧史）』（日本基督教団原町教会、一九六四年）五頁参照。

17 成瀬高「九〇年の歴史の重み」（『中村教会創立九十周年記念集』前掲、所収）九六頁より引用。成瀬高編『創立記念満七十五周年記念 原町教会七十五年畧史』（日本基督教団原町教会、一九七四年）五頁より引用。

年に福島県第三尋常中学校が設立された<sup>18</sup>。この中学校は後に鈴木が通う福島県立相馬中学校に改称する。

相馬の中村は仏教が盛んな城下町で、二宮尊徳の報徳思想が浸透しており、困難な伝道地であったが、吉田は激しい嫌がらせにも屈せず、信者が増え、原ノ町や小高方面にも出張した。吉田の手記によれば、「一八九三（明治二六）年二月二十二日午前九時、中村を出発して徒歩、道中道連れに伝道しながら午後六時小高在へ着す」<sup>19</sup>とある。当時、まだ常磐線が開通していなかったため、吉田は徒歩で原町や小高へ伝道に出かけた。さらに一八九五（明治二八）年七月の宮城中会記録に吉田による「相馬伝道」の報告が残されており、以下のよう述べている。

中村町以南は原ノ町・小高、北は駒ヶ嶺等を目標として其附近在々に及ぶ。今や相馬全土に普く道を伝へ、如何してか其中より数人を救んと計画最中なり。当地方は未だ鉄道の便なく、之れを順して人民の知識の度も亦た進み居らず、吾人の宗教に対しては外にはこれを擯斥するの風を粧ふ<sup>ひんせき</sup>虽<sup>よそおいえど</sup>も、内にては寧ろ敬するの心あるが如し。故に之に対するの伝道策を講究するに吸々<sup>きゅうきゅう</sup>たり<sup>20</sup>。

吉田は中村講義所を拠点にして、原ノ町・小高方面に伝道した。この働きを東北学院神学部（旧仙台神学校）の押川、ホーイ、シュネーダー、梶原長八郎<sup>21</sup>が協力し、各地で集会を開いた。一八九七（明治三〇）年八月二二日に

18 鎌田昌次郎「九十年の恵みと感謝」前掲、二六―二七頁参照。

19 吉田亀太郎「中村教会創立者吉田亀太郎牧師の手記」前掲、一四頁。

20 吉田亀太郎「相馬伝道」『宮城中会記録』旧字体を新字体に改め、片仮名は平仮名に直し、句読点を補った。

21 梶原長八郎（一八六五（慶応元）年九月一三日―一九二七（昭和二）年八月二四日）。一八八八（明治二一）年アメリカのフィラデルフィアに渡り、地質学者のベンジャミン・スミス・ライマンの助手を務める。一八九一（明治二四）年、牧師になるためプリンス頓神学校に入学し、一八九七年（明治三〇）年に卒業し、五月にフィラデルフィア第一長老教会で按手札を受けた。帰国後、若松日本基督教会担任教師となり、一九〇〇（明治三三）年東北学院神学部教授となる。以下のものが参照できる。『東北学院時報』一九二七（昭和二）年九月三〇日、三頁（東北学院史資料センター所蔵）。副見恭子「ライマン雑記

は、後の小高教会の主要メンバーになる六人が太田和村（現・南相馬市小高区）にある信徒の自宅（渡邊宅）でホーイから受洗されている<sup>22</sup>。

## 大曲駒村と鈴木良雄

一八九八（明治三一）年に常磐線が開通すると、原ノ町で定期集会が始まり、小高から原ノ町や中村講義所の集会へ足を運ぶ人が増えた。やがて一九〇〇（明治三三）年六月に原町講義所が設立され、この頃から梶原長八郎が毎週日曜日に仙台から小高に出張し、集会を開くようになった。そして一九〇一（明治三四）年四月二六日、鈴木安蔵の父・良雄の親友であり、歌人の大曲駒村（本名・省三、当時一八歳）に洗礼を受けている（写真参照、右：大曲駒村、左：鈴木良雄）<sup>23</sup>。大曲は、若くして父を亡くした安蔵が「私にとっては、亡父



（二一）』『地質ニュース』（六一七号、二〇〇六年一月）五七―七〇頁（[https://www.gsj.jp/data/chishitsunews/06\\_01\\_06.pdf](https://www.gsj.jp/data/chishitsunews/06_01_06.pdf)、閲覧日2025/08/23）。高橋 一葉「梶原長八郎の伝道とその思想」（『日本文学ノート』四一号、宮城学院女子大学日本文学会、二〇〇六年七月、所収）四〇―五二頁。

22 小高日本基督教會『教會員名簿』（小高日本基督教會、一九〇三[明治三十六]年）参照。（日本基督教団小高教会所蔵）。原簿によれば、この六人は同一の住所であることから、一緒に住んでいた渡邊家と安藤家であったと考えられる。名前を記すと、渡邊庄八、安藤伊之治郎、渡邊フミ、安藤キチ、安藤平松、安藤ヤス。なお、鈴木安蔵の姉の瑛（テル）が「何人かの信者が太田和の在にふえて、もう今は亡き人々だけど、墓標には『十字架』が記されている墓が今もある筈とさく」と記したのは、この家族の関係のことかもしれない。鈴木テル「小高教会八〇周年」（『小高伝道所80年の歩み』日本基督教団小高伝道所、所収）二四頁。

23 小高日本基督教會『教會員名簿』前掲、参照。写真は右が大曲駒村（二〇歳）、左が鈴木良雄（二六歳）。出典には駒村が二二歳とあるが、写真の裏に「[明治] 三六年七月」と書いてあったとあるので、二〇歳の間違い。なお、良雄はこの半年後の二月に亡くなる。鈴木安蔵「駒村さんのことども」（『書物展望』第一三巻五号、書物展望社、一九四三年五月、所収）七四頁。国立国会図書館デジタルコレクション（<https://dlndl.go.jp/>

について語っていた、ける唯一の人として、絶対にかけ替へのない人だった」<sup>24</sup>と述懐する人物である。

大曲駒村は小高地方に俳句文化を広め、『小高町史』でも「小高の黎明期<sup>れいめいき</sup>における先駆的文化人として忘れられない一人である」<sup>25</sup>と評されている。安蔵の姉・瑛が歌人となり、安蔵自身も「わたくしたちも小さいときから、俳句に親しんだ」<sup>26</sup>と語るように、俳句や短歌を愛するようになった背景には、小高に俳句文化を根付かせた駒村の影響があった。駒村は、良雄と俳句をはじめたきっかけについて、次のように述懐している。

明治三十二（一八九九）年秋の末であった。小高小學校の宿直室に當時の教頭眞鍋氏を訪ねて餘生君〔良雄の俳号〕と落ち合ふた時、「君俳句を作らうじゃないか」と云う事で互に三四句づ、怪しいものを捻つた。二人の間には福島新聞が披げられて、其の一面には隈水吟社<sup>くみずぎんしゃ</sup>の募集句が麗々しく掲げられてゐた。これが餘生君と自分が俳句に携はる抑々<sup>そもそも</sup>の皮切りだつた<sup>27</sup>。

当時、良雄は三星炭礦会社に勤めていたが、体調を崩して一時療養生活のため小高を離れ、一九〇一（明治三四）年三月に小高へ戻った。その一ヶ月後の四月に行われた駒村の洗礼式には、良雄も参列していた可能性がある。五月には駒村が勤めていた小高銀行の支配人代理となり、二人は職場でも顔を合わせるようになった。そして一九〇二（明治三五）年一月二一日、二四歳の良雄

---

pid/3555560/1/40、閲覧日 2025-08-23）。写真は『書物展望』前掲、口繪に収録。

24 鈴木安蔵「駒村さんのことども」前掲、七二頁。

25 小高町教育委員会 編纂『小高町史』（小高町、一九七五年）七九四頁。国立国会図書館デジタルコレクション（<https://dl.ndl.go.jp/pid/13243397>、閲覧日 2025-08-23）。

26 鈴木安蔵「阿武隈山のふもと」『赤旗』一九七三年（昭和四八年）五月一三日付（若松丈太郎『若松丈太郎著作集 第二巻』前掲、八五頁所収）。これは鈴木安蔵が六九歳のときに新聞に寄稿した文章として紹介されている。

27 大曲駒村「追憶小記」『餘生遺稿』（鈴木安蔵「駒村さんのことども」前掲、七四頁より引用）。隈水吟社は福島県における最初の正岡子規の俳句革新に応えた結社で、天野蒼郊や永井破笛などが指導的役割を果たしていた。

は小高でシュネーダーから洗礼を授けられている<sup>28</sup>。

長女の瑛が、「私の父が病弱のため信仰に入り、当時の東北学院のシュネーダー氏より洗礼を受けた」<sup>29</sup>と述べているように、病弱な良雄は聖書のメッセージに慰めを受けたのかもしれない。しかし、それだけでなく、駒村や良雄は、西洋文化に注目が集まっていた時代にあつて、欧米での経験が豊富で学問的素養の深い梶原長八郎やシュネーダーの言葉に強く心を動かされたと思われる。梶原はアメリカのプリンストン神学校で学んだ最初期の日本人の一人であり、当時の最先端の神学を修めていた。残されている説教原稿を読むと、聖書を原典から釈義し、十字架のキリストの恵みが倫理的行動へと至る心情を、論理的かつ情熱的に語りかける力強いメッセージが記されている<sup>30</sup>。また、シュネーダーについて安蔵は、「日本におけるキリスト教伝道の偉大な先駆者として駒村さんや亡父などもその教へをうけた」<sup>31</sup>と高く評価している。

ちなみに、安蔵は一九三六（昭和一一）年五月二八日に京都でシュネーダーと面会したことを、「忘れがたい收穫」<sup>32</sup>として、次のように報告している。

博士こそは我が亡父良雄が約三十五年前、キリスト教に歸依した際洗禮を授けられたその人なのである。私が未だ小學校に入らない頃であつたらう、私たちの郷里に來られて、熱心に説教された博士の姿が微かに記憶に残つてゐる。神様といふのをカメサマ——と慣れぬ日本語で語られたことをハッキリ覚えてゐる。爾來見ざること二十何年で、この靈界の偉人に會ひ得るといふことは歡喜であつた。しかも父の三十三回忌をこの四月に郷里でいとなんだばかりであつたから、一層なつかしく覺えた<sup>33</sup>。

28 小高日本基督教會『教會員名簿』前掲、参照。

29 鈴木テル「小高教會八〇周年」前掲、二四頁。

30 梶原長八郎「我儕ノ心ニ灌漑ガレタル神ノ愛」大正七（一九一八）年十月四日（高橋一葉「梶原長八郎の伝道とその思想」前掲、所収）参照。

31 鈴木安蔵「駒村さんのことども」前掲、七二頁。

32 鈴木安蔵「憲法史資料調査の旅——京都と土佐——」（『書物展望』第七卷四号、書物展望社、一九三七年四月、所収）二三頁。国立国会図書館デジタルコレクション（<https://dl.ndl.go.jp/pid/3555476/1/15>、閲覧日 2025-08-23）。

33 鈴木安蔵「憲法史資料調査の旅——京都と土佐——」前掲、二三頁。

安蔵が面会した当時、シュネーダーは既に二つの勲章を受けており<sup>34</sup>、翌月には勲三等旭日中綬章（一九三六年六月二日）の授与が予定されていた。当時の日本では、一九三二年の上智大学の学生による靖国神社参拝拒否事件を契機に、メディアの影響もあってキリスト教会や外国人宣教師に対する視線が厳しくなっていた。さらに一九三五年には国体明徴運動が激化し、一九三六年には二・二六事件が起こるなど、自由主義が後退し、国家主義・軍部主導の強化が進む時代であった。当然、宗教・思想に対する監視と抑圧が強まり、外国人宣教師への警戒が強まってくる時期でもあった。こうした状況下で、キリスト教宣教師に天皇から勲章が授与されることは、安蔵が「靈界の偉人」と呼んだほどの画期的な出来事であった。これは、安蔵が良雄の受洗そのものに加え、その洗礼を受けたシュネーダーに対しても誇りの念を抱いていたことを示している。さらに傍証を加えれば、シュネーダーは岳父の栗原基を訪ねて来たので、安蔵も彼との面会の機会を得たのであり、ここにもキリスト教との接点が認められる。

いずれにしても、大曲駒村と鈴木良雄は同時期に洗礼を受け、ともにキリスト教会に関わるようになった。安蔵はこの出来事について、「駒村さんは、当時における地方文化開拓・指導の最も新しい、最も進歩的な一つの形態であったクリスト教の挺身者でもあつた」<sup>35</sup>と評している。この言葉は、同時に一九四三年（三九歳）の安蔵が抱いていたキリスト教観の一端を示すものとも言える。

## 小高教会の設立と鈴木安蔵の誕生

小高町への伝道は、原町講義所を拠点として一九〇一（明治三四）年から活発化した。『東北教會時報』の同年四月二〇日の記事には、「小高町も大に有望

34 勲四等旭日小綬章（一九一六年一〇月三十一日）。勲三等瑞宝章（一九二四年二月一日）。

35 鈴木安蔵「駒村さんのことども」前掲、七二頁。

の地となり……多少の悔改者を生ずるを得たり」<sup>36</sup>との報告がある。同年八月二〇日の記事には、「奥野」という人物の演説会が開催され「聴衆三十餘人、有益なる勸告を受け大に感動せり」<sup>37</sup>と記されている。さらに一九〇二（明治三五）年二月二日には、仙台から宣教師のミラー（Edward Rothersey Miller）と、自由民権運動に挺身した後に牧師となった齋藤壬生雄を招いた演説会が行われ、「同地〔小高町〕は信者もあり、萬般の準備行届きたれば、聴衆も二百五、六十人計りありて、頗る有益なる集會なりき」<sup>38</sup>と報告されている。そして同年七月一〇日の記事では、「小高町には廿〔二十〕余名の信徒あり。集會者平均十名内外とす。原町講義所より分離獨立して一個の講義書を設立せんとて中會に出願中」<sup>39</sup>と、講義所設立に向けた動きが報じられている<sup>40</sup>。そして一九〇三（明治三六）年四月二日、原町講義所の土田熊治牧師が宮城中會に次の報告を提出している。

小高は原町の南方三里余の町にして付近村落を合して三十名の信徒を有す。孰れも有為多望の青年男女にして伝道熱心になり、目今は原町講義所に属すと雖も財政その他に於て原町講義所より分離し各種の委員を挙げて団体の事務を分担処理す。かくて他日講義所たるの資格を造りおれり。此の地の伝道は将来有望なり。求道者多く洗礼志願者数名あり。毎週一回集會を催す。出席平均二〇人。外に婦人会月一回集會す。明治三六年四月二

36 『東北教會時報』明治三四（一九〇一）年四月二〇日、三頁。（東北学院史資料センター所蔵）『東北教会時報』からの引用は、読みやすさを考慮して引用者が句点を補っている。

37 『東北教會時報』明治三四（一九〇一）年八月二〇日、二頁。（東北学院史資料センター所蔵）

38 『東北教會時報』明治三五（一九〇二）年三月三十一日、三頁。（東北学院史資料センター所蔵）

39 『東北教會時報』明治三五（一九〇二）年七月一〇日、四頁。（東北学院史資料センター所蔵）

40 明治三五（一九〇二）一〇月一七日夜には、五人の伝道師（土田熊治、森本厚吉、カッセルマン、梶原長八郎）が小高町の富田屋で秋季演説会を行い、「六〇餘名の聴衆始終傾聴せり」とある。『東北教會時報』明治三五（一九〇二）年一二月五日、五頁。（東北学院史資料センター所蔵）

一日 土田熊治<sup>41</sup>

同日、仙台市日本基督教会堂において開催された「宮城定期中会」において、「小高町講義所設立願之件」が議題に上り、梶原とシュネーダーが理由を説明し、無事可決された<sup>42</sup>。

記録によれば、講義所が新設された当初は、「従來の禮拜會の外定時祈禱會を開き會員奮て盡力中なり」<sup>43</sup>と伝道熱心な様子が報告されている。その会員の中には大曲駒村や鈴木良雄もあった。娘の鈴木瑛（安蔵の姉）は、良雄について「友人や銀行の人などを信仰に導いた熱心な信者だった」<sup>44</sup>と述懐している。良雄が信仰へ導いた最初の一人は妻ルイ（安蔵の母）であったと思われるが、良雄の受洗から三ヶ月後の一九〇三（明治三六）年三月四日、ルイは梶原長八郎から洗礼を受けた<sup>45</sup>。その三週間後の三月二九日には、駒村の妻である大曲ツルがノッス（Christopher Noss, 1869-1934）から洗礼を受けている<sup>46</sup>。さらに、安蔵に影響を与えた親族としては、良雄の弟である鈴木雄八も一九〇五（明治三八）年一二月一七日にシュネーダーから洗礼を授けられている<sup>47</sup>。

41 土田熊治「磐城国原町講義所教状」（日本基督教会神学校所蔵）。旧字体を新字体に改め、片仮名は平仮名に直し、句読点を補った。おそらくこれは同日に開催された「宮城定期中会」に提出されたものと思われる。

42 『宮城中会記録』『宮城定期中会』一九〇三（明治三六）年四月二日（東北学院史資料センター所蔵）。当時は定住牧師がいなかったので、シュネーダーや梶原が応援した。同記録によれば、福島県東部をシュネーダーと吉田亀太郎が担当し、福島県西部をシュネーダーと梶原が担当することを報告している。

43 『東北教會時報』明治三六（一九〇三）年六月五日、一頁。（東北学院史資料センター所蔵）

44 鈴木テル「小高教会八〇周年」前掲、二四頁。

45 小高日本基督教會『教會員名簿』前掲、参照。原簿によれば、場所は「小高」となっていたが、赤棒で訂正され、「行津」となっている。若松丈太郎は「井田川浦のほとり行津字鳥木迫（位置は六号国道の東三〇〇～五〇〇メートルほどの丘陵の中腹）」と場所を特定している。行津は良雄の療養先であり、彼が亡くなった場所も原簿によれば「福浦村大字行津寓居」となっている。したがって、梶原が良雄を見舞いに來た際に洗礼を受けたと考えられる。若松丈太郎『若松丈太郎著作集 第二卷』前掲、二四～二五頁。

46 小高日本基督教會『教會員名簿』前掲、参照。

47 小高日本基督教會『教會員名簿』前掲、参照。八雄との良好な関係については、中学

ところが、病氣療養中であった良雄は、受洗から一年二ヶ月後の一九〇四（明治三七）年二月一二日午前十一時、病のため満二六歳の若さで亡くなった。良雄を惜しむ心と妻ルイへの同情は、多くの人の胸に深く刻まれた。正岡子規の高弟として知られる俳人の河東碧梧桐<sup>かわひがしへきごとう</sup>は、全国行脚<sup>あんぎゃ</sup>の途上であつた一九〇六（明治三九）年十一月九日に小高町の良雄の墓を訪れ、大曲駒村と鈴木雄八（良雄の弟）、そしてルイと長女の瑛、そしてまだ二歳の安蔵に会った際のことを、次のように記している。

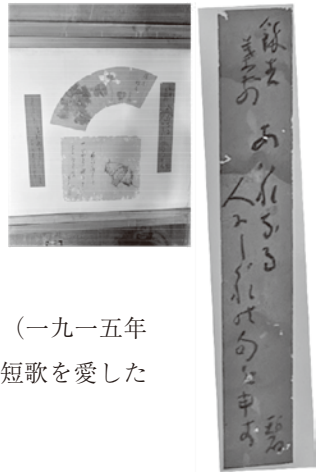
朝、餘生〔良雄の俳号〕の墓に参る。餘生に面識はなかつたけれ共、俳句の上では此地方の知己<sup>ちき</sup>であつた。年若うして妻子あり、身は不治の病に臥す、など言ひおこした事を想ひ出す。弟露生〔雄八〕<sup>さざんか</sup>山茶花を挿し、駒田野菊とぬるで紅葉<sup>もみじ</sup>を挿す。寒い風につれて時雨<sup>しぐれ</sup>が衣袂<sup>いべい</sup>にこぼれる。

哀れなる人に時雨<sup>しぐれ</sup>の句を申す

餘生の寡婦其遺子にも會ふ。

我を見て泣く人よ寒し我も泣く<sup>48</sup>

良雄に捧げた句は短冊に仕立てられ、現在も安蔵の生家として残されている居間の扉に掲げられている（写真参照、左：右端の短冊、右：拡大したもの）。駒村は俳人としても友人としても良雄の功績を高く評価し、遺稿集『餘生遺稿』（一九一五年〔大正4年〕）を出版した。娘の瑛や安蔵が俳句や短歌を愛したのは、亡き父と駒村の影響によるものだろう。



時代（一九二〇年）の文章や、戦後の日記（一九四八年十月一二日条）に夢に見ていることから窺える。鈴木安蔵「ポプラ樹陰の独語」『学友会雑誌』一八号、一九二一年三月七日、二六―二七頁参照。同論文は金子勝「鈴木安蔵氏思想——福島県立相馬中学校時代——鈴木憲法学の研究のために——」（『立証法学論集』第一九卷、立正大学法学会、一九八六年三月、一〇七―一一七頁）に収録。また、『鈴木安蔵を讀める会』ホームページに原本論文が閲覧可能。本論では原本の頁数を使用。

48 河東碧梧桐『三千里』（金尾文淵堂、一九一〇年）一三〇―一三一頁。国立国会図書館デジタルコレクション（<https://dl.ndl.go.jp/pid/889062>、閲覧日2025/08/25）。

良雄の訃報は『東北教會時報』にも、次のように報告されている。

本月〔一九〇四（明治三七）年二月〕十二日會員鈴木良雄氏永眠す。同氏は前途有望の青年にして地方の實業及政治のため一方ならぬ<sup>ひとかた</sup>尽力をせられ、受洗後<sup>なめづ</sup>行津に轉居し病を養ふの傍ら熱心に傳道せられし結果一名の信者〔ルイ〕と數名の求道者を得るに至れり。同氏の逝去は教會のため又地方の爲に一大損失なり<sup>49</sup>

この記事からは、良雄が小高の教会にとっても、また地域社会においても大きな存在であったことがわかる。

鈴木安蔵は、良雄の死から一ヶ月後、家族の悲しみがまだ癒えぬ三月三日に誕生した。のちに安蔵が残した日記には、四五年を経た一九四八年の良雄の命日に「若き日の母の悲しみをおもえば胸ふさがる」<sup>50</sup>と詠んだ一句が記されている。両親への敬慕の念は生涯続き、なかでも母への思いはとりわけ強かった。若き日に「学識を具へた政治家」を志したのも、「自分は母が第一にどんなにか喜ぶであらうとの理由が根本的決定的のものであった」と述懐している<sup>51</sup>。

瑛は、良雄の遺言として「熱心なクリスチャンとして一生をすごすよう、殊にてるの教育には心して当分はうそをつかせぬよう、つかぬように」<sup>52</sup>という言葉を紹介している。安蔵もこのエートスの中で育ったと考えられるが、相馬中学時代の演説でキリスト教徒の偽善的態度を批判（後で詳述）した背景には、「うそをつかぬように」という良雄の遺訓が影響していたのかもしれない<sup>53</sup>。

49 『東北教會時報』明治三七（一九〇四）年四月五日、六頁。（東北学院史資料センター所蔵）

50 立正大学所蔵「鈴木安蔵日記」（一九四八年二月十二日条）前掲、七七頁。

51 社会問題資料研究会編「思想研究資料第7輯」『京都学生事件の梗概と身上調査・日本赤色救援会資料』社会問題資料叢書第一輯（東洋文化社、一九八〇年）一六〇頁。

52 鈴木てる「杉山元治郎先生とわたし」（平田良衛編『農村だより』第二号、一九六六年〔昭和四一〕年二月一日）三頁。

53 鈴木安蔵「ボプラ樹陰の独語」前掲、二五頁参照。

鈴木安蔵は成長するにつれてキリスト教に批判的な姿勢を示すようになるが、それでも高校時代までは、思想的な葛藤の中に常に聖書の言葉との対話の跡が見られる。その詳細は後述するが、逆に言えば、それこそが聖書の言葉と信仰が安蔵に大きな影響を及ぼしていた証左でもある。それは「熱心なクリスチャンとして一生をすごすよう」という良雄の遺言に重なり、また受け皿としての小高教会の存在によって支えられていたのであろう。

小高教会では主日礼拝の出席者は多くなかったが、一九〇四（明治三七）年から始まった日曜学校（子どもの教会）は四、五〇人が集まり、安蔵が中学生になる頃には六〇人ほどにまで増えていた<sup>54</sup>。瑛が「二階の一間は日曜学校で私も弟〔安蔵〕も通い、きれいなカードを頂けることが何よりの魅力であった」<sup>55</sup>と述べているように、二人は日曜学校に通い続け、キリスト教との接点を持ち続けていた。そのような中、一九一〇（明治四三）年、安蔵が六歳のときに杉山元治郎が小高教会に赴任する。

今回は杉山元治郎時代の小高教会と鈴木安蔵の關係に注目する。

本研究は、日本学術振興会科学研究費助成事業（JSPS科研費、課題番号：25K00406）の助成を受けて行われたものである。

54 東北学院史資料センターと日本基督教会神学校が所蔵する宮城中会の記録を参照。鈴木瑛によれば、土田牧師が辞任して（一九〇八〔明治四一〕年一二月）から杉山元治郎（一九一〇〔明治四三〕年）が赴任するまでの間、「専任牧師なく信者の大方は死亡し、ほとんど教会の形すらなく、私達日曜学校の生徒も十人たらずであつた」と述べており、杉山が赴任するまでの一年間は教勢が少なかったと思われる。

55 鈴木テル「小高教会八〇周年」前掲、二四頁。